

## Document Citation

Title	<b>Kagemusha</b>
Author(s)	
Source	<i>Toho Kabushiki Kaisha</i>
Date	
Type	booklet
Language	English Japanese
Pagination	
No. of Pages	15
Subjects	
Film Subjects	Kagemusha, Kurosawa, Akira, 1980





黒澤 明監督作品  
影武者

"KAGEMUSHA"  
An Akira Kurosawa Film















## 新しい黄金時代の夜明けだ。

〈地獄の黙示録〉のフランシス・コッポラ

クロサワは数少ない現代の巨匠の一人だ。多くの偉大な監督は一本の代表作で知られているが、彼は八本も九本もの傑作を生んでいる。「影武者」のようにスケールが大きく、質の高い作品が日本で製作されることは素晴らしい。私はこの作品が日本映画にとって、新しい黄金時代の夜明けとなることを望む。



Akira Kurosawa is one of two or three living masters of the cinema.

Most great directors have one masterpiece by which they are known, but he has eight or nine. I think it's wonderful that a large-scale, high-quality film like "KAGEMUSHA" can be made in Japan.

I hope it signifies the dawn of a new golden age for the Japanese film.

Francis Coppola

## 格調高く、エキサイティング。

〈スター・ウォーズ〉のジョージ・ルーカス

クロサワは本当の巨匠だ。この作品は彼のこれまでの傑作に優るとも劣らない出来ばえとなるであろう。カメラは格調高く、優雅に構成され、照明も的確だ。合戦シーンは私がかって見たこともない程、エキサイティングだ。クロサワの映画技巧は、正に圧巻そのものである。これは素晴らしくも美しい映画だ。「影武者」は画期的な作品となるであろう。私はこの映画の製作に関与できたことを光榮に思う。



Kurosawa is truly a master of cinema. I think this new film will equal or surpass his best work. The photography is magnificent, beautifully controlled and the lighting is articulate. The battle scenes are the most exciting I've ever seen.

Kurosawa's filmmaking technique is overwhelming. It's a wonderful, lovely film. Generally, I think, "KAGEMUSHA" will be an extraordinary movie and I'm honored to be associated with the production.

George Lucas

## 測り知れないほどの偉大な作品。

〈未知との遭遇〉のスティーブン・スピルバーグ

クロサワの「影武者」は、測り知れないほど偉大な作品である。恐らく、彼の最高の作品となるであろう。戦闘場面は、スペクタキュラーでまさに独創的だ。ストーリーも、彼の他の作品同様に格調高く情熱的である。クロサワは、七十才にして尚われわれの師である。彼の存在は、生涯を映画に捧げることを念ずるすべての人々にとって、希望の星であろう。



Kurosawa's "KAGEMUSHA" could be his most important work to date. The production value is enormous. The battle scenes spectacular and truly original. The story as noble and passionate as any in his complete repertoire. He is an inspiration to any filmmaker who dreams of spending a full life in film when you consider that Kurosawa has even more to teach us in the seventh decade of his time.

Steven Spielberg







## スタッフ

プロデューサー	黒澤 明
"	田中 友幸
シナリオ	黒澤 明
"	井手 雅人
監督	黒澤 明
監督部チーフ	本多 猪四郎
アドバイザー	橋本 忍
撮影	斉藤 孝雄
"	上田 正治
撮影協力	中井 朝一
"	宮川 一夫
美術	村木 与四郎
音楽	池辺 晋一郎
録音	矢野口 文雄
照明	佐野 武治
アシスタントプロデューサー	野上 照代
外国版プロデューサー	

フランシス・コッポラ  
ジョージ・ルーカス

東宝映画 ■ 提携作品  
黒澤プロダクション  
配給 ■ 東宝株式会社

## STAFF

Executive Producers	Akira Kurosawa Tomoyuki Tanaka
Written by	Akira Kurosawa Masato Ide
Directed by	Akira Kurosawa
Production Coordinator	Ishiro Honda
Production Adviser	Shinobu Hashimoto
Photographed by	Takao Saito Masaharu Ueda
Photography supervised by	Kazuo Miyagawa Asaichi Nakai
Music by	Shinichiro Ikebe
Art Director	Yoshiro Muraki
Production Sound Mixer	Fumio Yanoguchi
Gaffer	Takeharu Sano
Associate Producer	Teruyo Nogami

### English Language Version

Executive Producers : Francis Coppola  
George Lucas  
Produced by TOHO CO., LTD.  
KUROSAWA PRODUCTIONS

## キャスト

武田 信玄	仲代 達矢
その影武者	山崎 努
武田 信廉	萩原 健一
武田 勝頼	油井 孝太
武田 竹丸	

### 《侍大将》

山県 昌景	大滝 秀治
馬場 信春	室田 日出男
内藤 昌豊	志村 隆之
高坂 昌信	杉森 修平
原 昌胤	清水 のぼる
跡部 勝資	清水 紘治
小山田信茂	山本 亘

### 《近習番頭》

土屋宗八郎	根津 甚八
雨宮善二郎	阿藤 海裕
原 甚五郎	島 香

### 《小姓》

甘利おくら	金 窪 英一
友野 又市	宮崎 雄吾

### 《信玄側室》

於ゆうの方	倍 賞 美津子
お津彌の方	桃 井 かおり
竹丸付き老女	音 羽 久米子
温井 平次	井 口 成人
織田 信長	隆 大 介
丹羽 長秀	山下 哲生
森 蘭丸	山中 康仁
徳川 家康	油井 昌由樹
石川 数正	土信田 泰史
本多平八郎	曾根 徳雄
酒井 忠次	松井 範雄
上杉 謙信	清水 利比古
田口 刑部	志村 喬
医 師	藤原 釜足

### 《乱波》

傀儡 子	田 辺 年 秋
塩 売 り	山 口 芳 満
托鉢 僧	江 幡 高 志
信玄を狙撃した鉄砲足軽	杉 崎 昭 彦

## CAST

Tatsuya Nakadai	as	Shingen Takeda
Tatsuya Nakadai	as	Kagemusha (Shadow Figure)
Tsutomu Yamazaki	as	Nobukado Takeda
Kenichi Hagiwara	as	Katsuyori Takeda
Kohta Yui	as	Takemaru Takeda
Hideji Otaki	as	Masakage Yamagata
Hideo Murata	as	Nobuharu Baba
Takayuki Shiho	as	Masatoyo Naito
Shuhei Sugimori	as	Masanobu Kosaka
Noboru Shimizu	as	Masatane Hara
Koji Shimizu	as	Katsusuke Atobe
Sen Yamamoto	as	Nobushige Oyamada
Jimpachi Nezu	as	Sohachiro Tsuchiya
Kai Ato	as	Zenjiro Amemiya
Yutaka Shimaka	as	Jingoro Hara
Yugo Miyazaki	as	Mataichi Tomono
Eiichi Kanakubo	as	Okura Amari
Mitsuko Baisho	as	Oyunokata
Kaori Momoi	as	Otsuyanokata

Kumeko Otowa	as	Takemaru's wetnurse
Natuhito Iguchi	as	Takemaru's attendant
Daisuke Ryu	as	Nobunaga Oda
Tetsuo Yamashita	as	Nagahide Niwa
Yasuhito Yamanaka	as	Ranmaru Mori
Masayuki Yui	as	Ieyasu Tokugawa
Yasushi Doshita	as	Kazumasa Ishikawa
Noboru Sone	as	Heihachiro Honda
Norio Matsui	as	Tadatsugu Sakai
Toshihiko Shimizu	as	Kenshin Uesugi
Takashi Shimura	as	Gyobu Taguchi
Kamatari Fujiwara	as	Medical doctor
Toshiaki Tanabe	as	Kugutsushi
Yoshimitsu Yamaguchi	as	Salt vender
Takashi Ebata	as	Begging monk
Akihiko Sugizaki	as	Gun-armed soldier of the Noda Castle







## 解説

黒澤明監督が日本映画としては「どですかでん」以来10年ぶりに演出する時代劇巨篇。

黒澤監督の時代劇作品といえば不朽の名作「七人の侍」をはじめとして「蜘蛛巣城」「隠し砦の三悪人」「椿三十郎」「用心棒」など枚挙にいとまがないが、「影武者」はその頂点に立つ作品といえる。加えて時代劇として初めてのカラー作品。その黒澤監督は1年間に及ぶ入念な資料調査をおこない、それをもとに200枚を超えるカラー絵コンテを描き上げた。これらの絵コンテは「影武者」の魅力とスケールの大きさを見事に伝えている。

時は戦国。武田信玄は自らの死に臨み、3年間その死を秘密にせよと遺言した。映画は偉大な武将の影武者として生きた1人の男の悲喜劇と、主人の遺言を守りながらもついには戦場に散っていった家臣たちの辛苦、そして信玄と鋭く対峙していた織田信長、徳川家康、上杉謙信ら戦国武将の激しい葛藤のさまを描き上げる。

「今や日本映画は新しい人材の発掘とそれを育てることから出直さなければならない」この黒澤監督の呼びかけに応じて全国から寄せられた1万5千人にのぼる応募者から選ばれた出演者たちは、萩原健一、山崎努、根津甚八、室田日出男ら既成の俳優陣に加え、無名塾の新人・隆大介、まったくドラマは初めてという油井昌由樹、志市隆之ら100名を超える(信玄と影武者の2役を演じる仲代達矢、侍大将山県役の大滝秀治、そして側室役の倍賞美津子、桃井かおりは監督のイメージ・キャスティングによる)

6月下旬の姫路城を皮切りに、熊本城・京都・伊賀上野・琵琶湖・御殿場・北海道と全国ロケーションをおこない、セット撮影を含めて292日間の撮影がおこなわれた。

製作費14億5千万円、加えて黒澤監督を師と仰ぐフランシス・コッポラ(「ゴッド・ファーザー」「地獄の黙示録」)ジョージ・ルーカス(「スター・ウォーズ」)、このアメリカを代表する2大監督が「影武者・外国版」プロデューサーとして参加、その結果製作前から世界配給が決まる(20世紀フォックス)など、これまでの日本映画のスケールを大きく越えて、黒澤映画の感動と魅力のすべてがここに結集された。

「影武者」は東宝が1980年代の世界におくる、日本映画のメッセージである。

## 物語

勇猛をもって知られ、その名を四隣にとどかせている甲斐武田「風林火山」の軍が、寒風吹きすさぶ三州街道を肅々とゆく。攻めあぐんだ三河の家康の砦、野田城を落城寸前まで追いこみながら、急に和議を結んで、ふたたび甲斐に向って兵を返すところである。

何故?……兵士たちの誰もがわりきれぬ思いを抱いての撤退だった。

「山」の部隊の中央には「風林火山」の孫子の旗を立てた信玄が悠然と馬を進めている。この総大将の姿こそ一軍の要であった。

だが……

それは実は信玄ではなかった。まことに兄に風貌生きうつしの弟、信廉である。彼が信玄の影武者として全く同じいでたちで出陣し何度かの合戦に敵を幻惑したことは人々の知るところであった。が、このとき、武田軍のほとんどは、この総大将が信廉であることを知らなかった。

では、信玄は?

まことの信玄は野田城攻めの一夜、勝利を目前にしながら鉄砲で狙撃され、重傷を負っていた。南蛮渡来の鉄砲が、古来の合戦の戦術を変えようとしていた天正元年のことであった。

信玄狙撃の報はまず三河の家康の許にとんだ。そして尾張の信長に、越後の信謙に……。各大名たちはこの報をうけて甲斐を注目した。信玄亡くば戦国の版図は一変するのだ。

こうしたさなか、重傷の信玄に最後の時がおとずれていた。一子勝頼や武田の部将たちの見まもる中、彼は苦しい息の下から遺言を与えた。

「……われ死すとも、3年は喪を秘し、領国の備えを固め、ゆめゆめ動くな」

雄渾空しく、英雄はここに世を去った。53才であった。

死を秘すことは難事であった。信廉を信玄として押し通すことはできよう。が、信廉が影武者であることは武田勢の多くが知っていた。敵をあざむくためには、まず味方をあざむかねばならぬ。そのためにはもう1人の影武者が必要だった。

もう1人の信玄……。実は信廉は、信玄とまったく瓜二つの男をかねて用意していたのである。無頼の盗人で磔刑になるところを、あまりの酷似に、ひろい上げて刑を免じ、養っていたのだった。信玄の死はその無頼の男を武田陣の中心に押し上げることになった。

口のきき方も馬の御し方も心もとないこの男は、しかし、当然のこととはいえ、武田の総大将の柄ではない。手こずった信廉は一時はこの計画を放棄しようとさえした。

だが、その“影の男”の心を何かがとらえた。信玄の遺骸を秘めた大甕を朝もやの諏訪湖に葬る感動的な光景を目撃した彼の脳裡に一度だけ、生前、目通りをゆるされた信玄の面影がよみがえったのである。

信玄の“影”が、こうして生まれた。だが問題は簡単

ではない。武田屋形に帰陣して、信玄の日常と同様に振舞わねばならぬ。近習や小姓などには事情を話して納得させたが、勝頼の息子である5才の孫、竹丸と顔を合わせねばならぬ。側室たちとも対面せねばならぬ。信廉、勝頼らが胆を冷やすことも幾度か。その都度、“影”は、しかし、不思議を素直さできりぬけて行っただ。次第に威厳のようなものをそなえるようになってゆく。

こうした成行きに、内心いら立ってきたのが、勝頼であった。信玄は世継ぎを、なぜか竹丸と決めていた。嫡子ではなくとも実子でありながら、家を継げぬ不満に、形の上のみとはいえ、この名もない“影”への服従が輪をかけた。彼ははやつた。

その頃、家康は武田への攻撃を計画し、兵を進めた。それはいまだに真偽さだからぬ信玄の生死をはかる陽動作戦でもあった。

これにどう対処すべきか、信廉、勝頼に加えて、重臣たちの評定が読く。その夜“影”は主戦派の勝頼を制して、決然と結論を下した。

「動くな。山は動かぬぞ」

勝頼は唇をかみしめた。

心中、大いにゆれ動く勝頼は、家康の軍に対応して、ついに独断で兵を動かした。目指すは高天神城。難攻不落を誇った聖域である。勝頼軍のみで落とせるとはとても思えなかった。武田軍は、やむを得ず、「風林火山」の旗を立てて勝頼軍の後方に陣をかまえた。“影”はもちろん、旗の傍らの床几に腰をすえている。

戦いは激烈をきわめた。乱戦の中、信玄の本陣も何度か危機に襲われたが、しかし“影”は耐えた。勝利は、山の如く動かなかった信玄の影の上におとずれたのだった。

こうして、すっかり“影”になりきって行っただ彼に不慮の事態が起ったのは、遺言の3年がすぎようとする頃だった。信玄だけが御し得た荒馬「黒雲」からふりおとされ、地面にたたきつけられたのだった。そして、走りよった側室たちの鋭い視線に、信玄の川中島でのあの刀傷がないのを発見されてしまったのである。

信玄の死は公表され、勝頼が武田家の当主となり、“影”はただの男にもどった。

天正3年春。勝頼は武田の全軍2万5千を率いて長篠に向かった。その勇壮な進軍の傍らを、あの“影”が身をかくしながらついてゆく。

5月21日、信長、家康の連合軍と勝頼の武田軍との戦いは火ふたが切られた。連合軍には鉄砲という新兵器による戦術がみごとに用意されていた。伝統を誇る武田の「風林火山」の陣立てはたちまちのうちにくずれてゆく地獄のようなその光景の中に、何かわからぬ叫びをあげて、とび出して行っただ男がいる。“影”である。その姿も、万雷のような銃声とともに地上にもんどりうった。

鮮血に赤く染まる流れの底に、孫子の旗が沈む。それに手をさしのべるかのように“影”の屍が静かに流れて行っただ……。



## INTRODUCTION

Kagemusha (Shadow Warrior) is a spectacular period drama directed by internationally famous Akira Kurosawa who five years ago also directed the Soviet production Dersu Usala.

To make Kagemusha, Kurosawa first carried out a painstaking research over a one-year period, and, on the basis of the materials collected, prepared more than 200 color sketches.

During the Age of Civil Wars about 400 years ago, when Shingen Takeda, warlord of the present-day Yamanashi Prefecture, lay dying, he requested that his death be kept secret for three years. He feared that news of his demise would jeopardize the future of the Takeda family.

The movie depicts the strange life of the man who became the "shadow warrior" of the great Shingen, as well as the rise and fall of civil war heroes such as Ieyasu Tokugawa and Nobunaga Oda.

Shooting locations ranged the length of Japan, starting at Himeji Castle, in Hyogo Prefecture west of Kobe, towards the latter half of June. The locations then shifted to Kumamoto Castle in the main southern island of Kyushu, back to the center-stage of Japanese history — the ancient capital of Kyoto, and Iga Ueno, then all the way up to the northernmost main island of Hokkaido, and back down to Gotemba at the foot of Mt. Fuji.

Nine months were spent on shooting the scenes on location and on the set. Spectacular action scenes, such as the Battle of Nagashino, were filmed on the Yuhara Plain in Hokkaido, where 168 horses were purchased for the purpose. Seven weeks were devoted to filming the battle actions.

For the first time in Japanese motion-picture history, Kagemusha will be distributed worldwide through 20th Century Fox's global network. Francis Coppola and George Lucas are participating as executive producers in the overseas version of the film.

## SYNOPSIS

1573. Famed throughout Japan for bravery, the Takeda Army is considered invincible with Shingen Takeda as its leader. Shivering in the icy winter wind, Shingen's troops trudge toward their home province, Kai, Their banners bearing the inscription, "Wind, Forest, Fire, Mountain."

Japan is turbulent with civil wars. The Takeda Army had raided Noda Castle, belonging to Ieyasu Tokugawa, Takeda's archenemy, who later unified the nation. The castle could have been defeated in but a few days, but Shingen reconciled with the garrison and withdrew for his home in the mountains. Why?

The central figure amid the main body of his forces, Shingen Takeda, who all anticipate will be the next ruler of Japan, is sheer dignity on his horse. His banner bears the four characters quoted from a Chinese strategist. He is the object of unanimous respect.

But the main is not the real Shingen Takeda. It is his brother, Nobukado, who somewhat resembles the great lord. The real lord is seriously wounded and dying. A sniper had shot him the night before his possible victory. Guns, a new weapon introduced to Japan by Western missionaries, are quickly changing military strategy in the Far East.

News of Shingen's injury is reported first to Ieyasu Tokugawa in Mikawa, then to Nobunaga Oda in Owari, finally to Kenshin Uesugi, a powerful lord in Echigo.

Shingen is breathing his last: "If I die, keep my death a secret for three years. Improve our territory's defense. Never go out to attack."

At age fifty-three he dies before his ambition is materialized.

It is difficult to keep the secret, however. Nobukado can act like Shingen and fool the enemy for a while. But everybody in Kai knows Nobukado is his brother. To deceive the enemy, one must first deceive one's friends and allies. A double is therefore indispensable.

A resourceful man, Nobukado had prepared for such an occasion. He had found a man identical in appearance to Shingen. The man, a thief, was about to be executed when Nobukado saved his life because of the keen resemblance. Now that Shingen is dead, the survival of the Takeda Clan depends on the ex-thief.

Shingen's double has many things to learn — to act, speak, ride a horse like the dead man — and it is all very difficult. Naturally he has no faculty as a great war lord. But something has changed him since he saw the big jar containing the body of Shingen sink into Lake Suwa. He remembers the day when he once saw Shingen himself and was greatly

impressed.

Shingen's double is thus created. But there are many tests to pass to make all the retainers believe he is Shingen — he must meet Shingen's five year old grandson, Takemaru, and Shingen's concubines who naturally know the lord well. But his double passes every test admirably. And he is gradually takes on an air of authority.

Katsuyori, Shingen's son, becomes nervous at the progress being made. Shingen had chosen Takemaru, Katsuyori's son, as his successor — Katsuyori being the son of a woman Shingen loved, not of his wife. His silent fury against his father's choice is doubled by his being compelled to obey an ex-thief.

Ieyasu Tokugawa is plotting an invasion of Kai, Takeda's home province. He send a force to attack a Takeda castle as a test, the real purpose of the operation being to ascertain the truth about the death of Shingen. How would the real Shingen handle the invasion? Nobukado, Katsuyori and other leaders discuss the problem day and night. Finally, opposing Katsuyori's opinion to fight, Shingen's double voices a conclusion: "Do not make any move. Mountains do not move."

Katsuyori can no longer restrain himself. He musters his own troops and raids the Ieyasu Army at their impregnable Takatenjin Castle. The Takeda Army, too, takes its position behind Katsuyori's troops, waving its banners of "Wind, Forest, Fire, Mountain." As leader, Shingen's double sits beside the banner. The battle is fierce. But victory shines on Shingen's double, who has not moved from his position. He is definitely like Shingen now.

The three years, as wished by Shingen, have almost passed when an incident precludes final success; Shingen's double is thrown by a violent horse which only the real Shingen could ride. The concubines run to him and discover his shoulder scarless; Shingen was wounded during the battle of Kawanakajima against Kenshin Uesugi, which left a scar on his shoulder.

The death of Shingen is publicized. Katsuyori succeeds his father as Lord of Kai, and the double becomes a mere soldier.

In spring, 1575, Katsuyori leads 25,000 men to Nagashino to fight a decisive battle against the combined forces of Oda and Tokugawa — troops armed with guns. Takeda's conventional strategy is no match for the new weapons. During the hellish combat, a man charges the guns screaming like a wild animal — Shingen's double. He falls in a hail of bullets.

The banner of "Wind, Forest, Fire, Mountain" sinks in the red water. As if reaching for it, the body of Shingen's double floats down the river.







## プロダクション・ノート

’78年12月20日

■東京・丸の内東京会館で製作発表。黒澤監督の弟子と自ら名乗る米二大監督フランシス・コッボラ、ジョージ・ルーカスの協力で、二〇世紀フォックスから全世界に配給されることを発表。この日、米ロサンゼルススのフォックス本社でも同時発表。このような快挙は日本映画ではもちろん初めてのこと。また、取材陣の目を奪ったのは、水彩・パステル画によって描かれた二〇〇枚の黒澤監督自筆による絵コンテ。鎧、兜から騎馬武者の戦闘場面、戦国武将達の面構えなど、作品の演出プランを入念に表わしたものであった。

’79年1月20日

■配役に関してはオーディションによるという事が製作発表で語られ、全国の主要新聞にその公募広告を掲載。この時の黒澤監督のメッセージはこうだ。「今や、日本映画は新しい人材の発掘とそれを育てる事から出直さなければならぬ。監督、脚本、撮影、録音、美術その他映画の芸術的技術部門の新人育成は勿論急務だが、それは相当の年月を必要とする。しかし、俳優の新人の育成は一つの映画の製作過程で、充分とは云えないが、不可能ではない。私はこの作品で、俳優の新人を発掘し、その才能を育てると共に、既成の俳優諸君にも新人のつもりで取組んで貰い、この映画を新鮮なものにしたいのだ。

’79年4月28日

■東宝・砦のスタジオで配役発表が行われる。一万五〇〇〇人も応募者の中から、書類選考でまず千人。この後、数回の面接などから、主要出演者二七人を始めとする八〇人近い出演者が決った。この中には「天国と地獄」でデビューした山崎努をはじめ、個性派の萩原健一、根津甚八。そして、スポーツ用品店の経営者の油井昌由樹、仲代達矢の主宰する“無名塾”の隆大介などというプロ・アマ問わずの異色キャスティングが組まれた。

’79年6月27日

■二ヶ月間のリハーサルの後、姫路城ロケからクランク・イン。信長・家康のシーン、そして、野田城攻略を練る武田の侍大将達のシーンが中心となった。姫路城は国宝の乾小天守と「ろ」の渡り櫓の二ヶ所が中心となった。これは映画撮影のために初めて開放されたもの。

’79年7月25日

■仲代達矢が信玄とその影武者の二役を演じることが発表された。すでに主役に決っていた勝新太郎に代わり、仲代に決ったもの。仲代はこの日から約一ヶ月間、黒澤監督と作品についてのディスカッション、メイク、扮装テスト、リハーサルを行い、セット撮影を中心にプロローグの撮影に挑んだ。

’79年8月28日

■武田屋形のオープンセットの撮影開始。富士山裾野・静岡県小山町に武田屋形が再現された。一五〇〇坪の広大な土地に一億二〇〇〇万円もの費用で、古絵図・躰躰崎武田屋形を参考に、四月から五ヶ月がかりで建てられたもの。正門を入ると広場があり、その向こうに信玄の住居となる本主殿の一部、右手には唐門、くぐり抜けると御裏方の住居、毘沙門、不動堂、飯縄堂と見事なセットが建ち並ぶ。山崎努、大滝秀治、室田日出男ら侍大将達が、勝頼が単独で高天神城へ出陣したという報を聞くシーンから撮影された。

’79年9月18日

■黒澤監督一行は北海道ロケハンに出発。すでに“高天神城の戦い”“長篠の戦い”をはじめとするスペクタクルシーンの撮影は北海道の苫小牧市郊外の勇払原野で行われることが決っていたが、そのロケ現場の最終確認が目的。また、これらのスペクタクルシーンのため、牧場を借り切り、一六八頭の馬を購入、七月から馬の調教にあたっていたスタッフの陣中見舞いも行った。

’79年10月6日

■北海道ロケ開始。太平洋に面した浜厚真の海岸で勝頼が、馬で疾走するシーンが第一日目。この北海道ロケのヤマ場は、“長篠の戦い”で、信長、家康の連合軍の馬防柵に武田の騎馬軍が突撃してゆくシーン。四〇〇メートルの馬防柵が作られ、二三〇頭の騎馬が土煙りを撒き上げて突撃してゆく。このシーンだけで二週間の撮影が行われた。七週間にわたる北海道ロケの決算は、ロケ参加総人員、二万六〇〇名。馬動員、四一五〇頭、ロケ取材記者のべ七二三名。台風二〇号にも見舞われ悪天候のため、撮影中止すること七日間、撮影したフィルムは上映時間にして九時間におよんだ。

’79年11月12日

■外国版プロデューサーのコッボラ、ルーカス一行が来日。北海道ロケの黒澤監督を訪れた。この日の撮影は信玄の影武者となった盗人が武田騎馬軍の閲兵を受け、調子に乗って影武者が落馬するところ。黒澤監督は、コッボラ、ルーカスにカメラのファインダーをのぞかせ、シーンの説明や、馬の撮影の苦勞を語り、なごやかな交歓を行った。

’79年12月7日

■熊本城ロケ開始。北海道ロケから帰った黒澤監督は編集作業にはいったが、一二月の主なロケは、熊本城、京都、伊賀上野城。熊本城では“野田城攻め”で信玄が狙撃されるという重要なシーンや、“高天神城の戦い”の勝頼の本陣の撮影などが中心となった。連日、エキストラ二〇〇名近くを動員して、北海道ロケで撮影できない城の石垣を使ってのスペクタクルシーンが撮影された。

’80年1月8日

■東宝・砦のスタジオに戻った黒澤監督は、武田屋形、軍評定のシーンから新しい年を迎えた。家康の陽動作戦に血気に逸る勝頼が、影武者に出陣をうながすシーン。一日リハーサル、一日本番という撮影ペースで進められた。一月は、影武者と竹丸のからみのシーンが中心。この竹丸役の油井孝太君、家康役の油井昌由樹の長男。親子そろっての黒澤作品出演ということは初めてのこと。

’80年2月9日

■砦のスタジオで“薪能”シーンを撮影。諏訪大明神奉納の“薪能”に影武者が堂々と臨むシーン。精巧な張り子の杉の木が二五本、能舞台の周囲には五トン車三台分の白川砂。このセットの設営に八日間も費やされた。出演者総勢一九〇人。この見事なセットに、再び来日したコッボラ監督は感動。「私はセットを見せることも他人のセットを見に行くことも好まない。しかし、今日は日本古来の能のシーンなので、その素晴らしさに打たれた。来てよかった」と熱っぽく語った。

’80年3月5日

■ラストシーンの撮影が始った。適当な河が見つからず、やっと決ったロケ地は和歌山県熊野川澍八丁。“長篠の戦い”で崩壊した武田軍の屍の中、「風林火山」の旗を求めて影武者が河にとびこみ、息絶えるシーンだ。大櫓を組んで超俯瞰ショットの撮影のためや、大雨で河の水深が増して撮影ができなかったりで、このシーンだけで一週間かかった。

この後、砦のスタジオに戻り、“影武者の夢”のシーンなどの撮影を行い、クランク・アップしたのは四月七日だった。この「影武者」は実に九ヶ月以上もの撮影が敢行されたのだ。



# 黒澤作品の軌跡

「姿三四郎」から「デルス・ウザーラ」まで



■姿三四郎

- 姿三四郎(1943)
- 一番美しく(1944)
- 続姿三四郎(1945)
- 虎の尾を踏む男達(1945)
- わが青春に悔なし(1946)
- 素晴しき日曜日(1947)
- 酔いどれ天使(1948)

人間は植物ではない。勿論、動物である。

その動物的な欲望や活力は、あくまで旺盛であるべきだと思う。しかし、それに打ち勝つだけの強い理性をもっていなければ人間とはいえないのだ。この作品をつらぬいているものは、そういう意味の人間復興の精神である。

ただ単なる善悪の観念であってはならない。

- 静かなる決闘(1949)
- 野良犬(1949)

僕は、一生に一人でもいいから頭に焼きついて忘れられないような人間を描いてみたいと思っている。

「野良犬」を演出する心構えも一口にいえばそれに尽きる、この映画には、二人の主人公をとりまいて沢山の人物が現れる。そしてさっさと消えて行く。しかしその一人一人の人物が印象的に描けないと主人公が浮彫りにならない。

- 醜聞(1950)
- 羅生門(1950)



■七人の侍

- 白痴(1951)
- 生きる(1952)
- 七人の侍(1954)

大体活劇といったって、単に爽快味だけを狙うのは僕の目的じゃない。少年冒険物語だけはよそうと最初から言ってるんです。僕はその活劇の底にある人間の実感を出したいんだ。

- 生きものの記録(1955)
- 蜘蛛巣城(1957)
- どん底(1957)
- 隠し砦の三悪人(1958)

シナリオを書いている時、朝起きて僕が絶対に突破出来ないという設定を作る。すると他の三人(菊島隆三、橋本忍、小国英雄)が、何とか突破しようと苦心する。こうして毎日少しずつ書き進めて出上がったもので、僕としてはプラスバンドでも入れられるような壮快な時代劇にしたい。

- 悪い奴ほどよく眠る(1960)

汚職事件は、ほとんどの場合末端に現われた人間が犠牲となって罪に問われ、その背後にあつて汚職を操った大モノはまんまと司直の追求を逃がれ、枕を高くしている。つまり、悪い奴ほど枕を高くして眠っている。そんなところが題名になっているわけです。

- 用心棒(1961)



■用心棒



■赤ひげ

今の映画は、変におしゃべり…いいかえれば主張が多すぎるんじゃないかな。映画というのは、映像を見てもらうことで楽しむのが本当で、映像を忘れてしまつてはだめですよ。

- 椿三十郎(1962)

まず映画は人に見られるためのもの、映画のだいご味をたっぷり盛って映画の魅力をできるだけ多くの人に知ってもらいたい。

それが僕が娯楽時代劇をとる理由です。

- 天国と地獄(1963)
- 赤ひげ(1965)

日本映画の危機が叫ばれている。がそれを救うものは映画を創る人々の情熱と誠実以外にはない。私はこの「赤ひげ」という作品の中に、スタッフ全員の力をギリギリまで絞り出してもらおう。そして映画の可能性をギリギリまで追ってみる。

- どですかでん(1970)
- デルス・ウザーラ(1975)

—— 当時のプレス宣材より抜粋 ——

衣裳提供 ■三松／協力 ■日本航空／上野市・伊賀上野城／熊本市・熊本城／姫路市・姫路城 〈サントラ盤〉コロムビアレコード





黒澤明監督の絵コンテ「野田城・夜」部分図  
Sketch : drawn by Akira Kurosawa



